

誘惑に勝つ秘訣

マタイ福音書 4 章 1～11 節

夏、開放的で心も緩むのか、誘惑に陥りやすい季節であります。心がウキウキする行事といえば、祭りかもしれませんね。日本でも月に 3～4 回の祭りがありますが、夏は断トツで他の月の 2 倍以上だそうです。先週の「めぐみ祭り」どうでしたか？楽しかったですね！心ウキウキ、でもそんな時、問題が起こり易い、誘惑に陥りやすいのです。

誘惑はどの時代でも、どの国でも、又、若者だけでなく、どんな年齢の人にも来ます。誘惑に負けてエデンの園から追放された人間が置かれた「さすらいの地」であるこの世は、誘惑に満ちています。神の言葉を退け、人は自分の知恵により欲望のまま、自分第一に生きるようになったからです。「人が誘惑にあうのは、それぞれ自分の欲に引かれ、誘われるからです。そして、欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。」(ヤコブ 1 : 14～15)とあります。そしてその欲望は「肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るもの」(I ヨハネ 2 : 16)であると、聖書は言っています。救い主となられるイエス様は、これらの全てに勝利されなければならなかったのです。人として生きるイエス様。大工の子として、父なき後は一家を支えて来られたであろうその間も、これらの誘惑は他の人と同じようにあり、そしてイエス様はそれらに勝利してまいりました。でも、静かに一家庭人として暮らすイエス様を、サタンは執拗には誘惑しなかったことでしょう。

しかし、イエス様が神の子・救い主としての公生涯に立たれたとあっては、放っておくわけにはいきません。私事ですが、私も伝道者という公生涯に立つ直前に、イエス様ほどではありませんが、試みを受けました。神学校に行くにあたり、自分の持ち物全てを預けていた鹿児島の実家が火事になり、すべての持ち物を失うという試練です。知らせを受けた直後は驚きましたが、しかし不思議なことに、数分後には喜びが湧いてきましたと以前お証しした通りです。この証詞も本日出版した本「日本の心と聖書」に載っていますから、ぜひ読んでください。本題に戻り、皆さんは“なんで！聖霊が、サタンの誘惑へと導くの？”と不思議に思ったことはありませんか？「悪魔の試みを受けるために、御霊に導かれて荒野に上って行かれた。」(: 1)とあります。サタンはイエス様を強力に誘惑しました。またそれは、イエス様が救い主としての働きをするためには、どうしても通らなければならない道でありました。そして、勝利しな

ければ使命を果たせない事柄でもありました。それ故あえて、聖霊が荒野(試練の場)へと導いたのです。40日40夜断食という厳しい状況にイエス様は置かれました(私は断食3日で音を上げました)。

断食のゆえに空腹になったイエス様への第1の誘惑は「**あなたが神の子なら、これらの石がパンになるように命じなさい。**」(：3)でした。あなたは出来ますか？出来ない！残念がることはありません。それは当然です。全能でない私たちにとって「石をパンにする」ことは不可能です。そしてサタンは出来ないことをもって誘惑することは決してありません。神の子として全能の力を持つイエス様だから可能です。ご存知の通り、後に、5,000人を2匹の魚と5つのパンで養いました。でもこの時、イエス様はサタンの問いに直接、「出来るよ」とも「出来ない」ともお答えになりませんでした。もし、「出来ない」と言うなら、お前は神の子なんかじゃない。救い主じゃないのじゃないかとの、隠された誘惑があります。普通、人は自分を否定されることには耐えられません。出来ることを見せたい、証明したいと誘惑に乗ってしまうのです。ですから、この誘惑には更に、隠された誘惑が2つあります。1、神の子としての力を、先ず自分のために用いさせようとするたくらみがあります。私たちも、神が与えて下さった力を誰のために用いますか？そして2、何よりも石をパンにする力を持っているのだったら、この世の食糧問題を解決しなさい。貧しく飢えている人々を援けなさい、という誘惑です。もちろんこれも大事です。でも、霊的救いの問題を、この世的な問題にすり替えています。真の幸いは、単にこの世の問題の解決では果たせません。私も、皆さんの中にも貧しかった戦後を経験している人がいるでしょう。そして今は豊かになりました。それで問題はなくなっただけでしょうか？悪は、罪はなくなりましたか？答えは、**No!** ですよ。イエス様に石をパンにできるか、出来ないかと視点をずらして誘惑したように、サタンはあなたにも、色々のやれば出来そうなことで「出来るか！出来なければ、やっせんぼ(ダメな奴)だ！」と誘惑してくることを忘れてはなりません。でも、問題は出来るか、出来ないかではありません。それを行うことが神の御旨であるか、どうかということなのです。ここに、神に問う祈り心が必要です。

祈り、神の御旨を示されていたイエス様は、「**人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る1つ1つのことばで生きる**」(：4)と聖書の言葉をもって応えました。確かに、人が生きるためにはパンは必要です。でも人間にとって、もっと大事なものは、神の御ことばを聞き、それを生きること、いえ、神の御旨を生きようと心定める時、かえって私たちは、神によって生かされるのです。「ま

ず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。」(マタイ 6 : 33)とは真実です。

第 2 の誘惑は、人の目を引き付ける、驚きをもって人の心を支配することでありました。人が多く集まる神殿の屋上から、飛び降り、空中を浮遊することでした。サタンは言いました「あなたが神の子なら、下に身を投げなさい。『神はあなたのために御使いたちに命じられる。彼らはその両手にあなたをのせ、あなたの足が石に打ち当たらないようにする』と書いてあるから。」(: 6)。神の子ならそれが出来ると、聖書が言っているからと、詩篇 91 篇を引用しました。このように、サタンでさえ聖書の言葉を用い、光の天使を装って誘惑することさえあることを心に留めましょう。聖書の言葉だからと一面でとらえてはなりません。ここに聖書全体を読む必要の大事さを見ることができます。イエス様は「あなたの神である主を試みてはならない」(: 7)と申命記 6 : 16 の御言葉をもって退けられました。また、イエス様の奇跡の行為は、人を引き付ける目的ではありません。愛の行為の結果として、溢れ出た力が奇跡を生み出しているのです。

第 3 の誘惑。人にとっての誘惑の最後は、栄耀栄華、そして権力であります。イエス様が世界の王となれば、すべての問題は解決するでしょう。しかしその前に、サタンにひれ伏し拝むという条件があります。「悪魔はまた、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世の全ての王国とその栄華を見せて、こう言った。『もしひれ伏して私を拝むなら、これをすべてあなたにあげよう。』」(: 9) どんなに多くの人がこの誘惑に負けて、自分こそこの世の王にと、戦争をしてきたことでしょう。日本でもかつて、天皇を神として拝むなら、キリスト教を続けても良いよと、御真影を拝まされ、礼拝の中で宮城遥拝を強いられました。今も共産圏においては同じ誘惑を受けています。どんなに豊かになろうと、科学が進歩しようとして、心が救われ、イエス様に似た者へと変わらない限り、我こそは 1 番、私の支配する国こそ一番と争いは続きます。そのような権力のもとには、救いも神の国もないことを、私たちは歴史からも学びました。

私達も主イエス様と共に「下がれ、サタン。『あなたの神である主を礼拝しなさい。主にのみ仕えなさい』と書いてある」(: 10)と言いましょ。神の御旨を知るため、祈り心をもって聖書を読みましょ。好きな聖書箇所だけでなく、聖書を全体的に読み、心に蓄えてゆきましょ。みことばに従って生きることによってっしか、サタンの誘惑に勝利する道はないのです。